美術の窓(43)

特別展「中国の金銅仏」にちなんで

大和文華館館長　吉川逸治

今秋の特別展は、東洋古代の金銅仏という題で、日本国内に現存する作品によって、中国六朝から隋唐の盛時を経て、宋元にいたる諸時代の金銅像を中心に展観し、仏菩薩を対象とした東洋古代の人間像の理想形式の一つの流れを観察してみようという企画です。

古代後期は、東洋のみならず、世界の東西に渡って、広く金銅仏の制作が行なわれた時代です。古代古典美術の人間像を中心に置く文化が広まって、各個に独立して、諸民族の間でこれまでの人間像の無い様々の文様構想を核心とする美術構成に対して新たに人間像的思考を中心とする文化形成を促す傾向が現れます。これが古典的人間像を展開してきた東西世界の中央部から四方に広まることになるので、青銅の形像によって新しい形態が成立し、これまでの青銅技術が新しい形で存続し発展して、青銅は磨崖像、石像と並んで、造像技術の分野に重要な地位を築きます。やがて、塑造、泥像、木造など広範囲に渡る代換材料の出現によって、青銅像は次第にその領域を蝕まれますが、鍍金仕上げによって、極小の像から極大の大像にいたる広範囲に渡る栄誉ある位置は長く保持され続けます。

青銅犠牛首　中国・殷時代

青銅人物像　中国・戦国時代

金銅如来坐像　中国・北魏時代

金銅釈迦如来立像　朝鮮・統一新羅時代

季刊 美のたより №99
平成4年5月14日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.